

緒ヲ開キ現在裨益少ナカラス候処右等事業ノ儀ハ概ネ時好ト依嘱者ノ希望ニ依リ教員ノ意見ハ勿論參酌候ヘトモ(斯ノ如キハ實地製作ニ適セサルモノ間々有之且ツ成工期限ノ短日)同種類ノモノ某科ニノミ傾偏スル等各科全体ノ上ヨリ(往々)遺憾(有之)少ナカラス候然ルニ内外ノ博覽會共進會等へ出品ノ為メ宮内省農商務省其他ヨリ本校教員へ直接依嘱セラル、製作物ハ専ラ技術家自身ノ所長ヲ顯ハスヘキ特殊ノ製作ニシテ獎勵的ノモノニ有之殊ニ本校教員(ノ如キ)ハ當代屈指ノ名家ニシテ之レカ製作物ハ直チニ本邦美術ノ代表者タルヲ以テ容易ノ業ニ無之刻苦經營(セサルヘカラサ)シ以テ優秀卓越ヲ希望スル(ヲ以テ)カ故ニ到底依嘱製作ノ比ニ(無之)アラス然ルニ之等ノ製作ハ渾テ本校授業時間以外自宅ニ於テ夜間若クハ休日ノ業トシ生徒ノ如キハ僅々一回若クハ二回教員ノ自宅ニ就テ(見ル)觀觀スルニ止マリ其意匠圖按材料ノ如何製作法等最モ必要ナル点ハ(見)得ルニ因ナク眞ニ遺憾ノ儀ニ有之候故ニ之等製作物ハ本校教室及ヒ授業ニ差支無之限リ材料及ヒ用具ノ區別ヲ明カニシ(二字不明)決シテ學校品ト混交セサル様致シ生徒實地製作ニ有益ト認メルモノハ本校教室内ニ於テ製作セシムル様致度既ニ佛國(博)博覽會へ出品ノ製作品ニモ時期接迫ノ折柄ニ付至急御許可相成候様致度此段仰裁可候也

年 月 日

④ 美術学校騒動

(一) 岡倉校長辭職

明治三十一年三月二十二日、岡倉覺三は帝國博物館理事兼美術部

長ノ職を辭し、次いで同月二十九日、本校校長を辭任した。岡倉が日本美術の創造的復興を目標に掲げて本校を設立し、献身的に運営にあたったことはすでにみてきたとおりであるが、その努力によって本校の基礎ができ、新たに發展しようとしていたとき、突如辭職を余儀なくされたのであった。辭任演説の中の「予ハ好んで自ら去るを屑よしとする者に非るなり」(32頁參照)という発言には業半ばにして官途を去る無念の思いが込められている。辭職の原因についてはさまざまの見方がなされてきたが、岡倉自身は次のように述べている。

一八九六年、この學校に西洋画と西洋彫刻の課程を加えることを命じた。この時以後、學校の運営について、主として西洋式方法の果たすべき役割をどの程度まで教科課程に認めるかという点でさまざま意見の食い違ひが起こり、一八九六年には遂に分裂するまでにいたり、岡倉、雅邦、觀山、大觀、覺弥、紫水、雪声、広業、如雲、古拙、千虎、香雪、その他の人々が職を辭して、同じ年に日本美術院という名の私立の美術施設を設立することになったのである。

上野の美術學校は、その時以後、西洋派の部門を大きく拡大して、もっぱら西洋派を中心とするようになった。(下略)

(岡倉覺三「現代日本美術について」『覚書』「Notes on Contemporary Japanese Art, By Prof. K. Okakura. The Studio. Vol. 25, No. 108, London 高階秀爾訳。『岡倉天心全集』第二卷。昭和五十五年。平凡社)

事実、岡倉の言うとおり、西洋画科設置を契機に西洋美術をさらに積極的に導入しようとする動きが強まり、学校の方針をめぐる岡倉派と反岡倉派の対立は深刻化していった。そして、後者は校外の反岡倉派とともにジャーナリズムを通じて岡倉校長排斥運動を推し進めたが、その機に乗じて私憤をはらそうとする者もあり、その策謀などにより、岡倉の辞職は決定的となったのであった。開校以来、天才型の独裁的指導者として本校に君臨し、美術界に対して強い影響力を持っていた岡倉には熱烈な信奉者があった反面、そうした批判者も少なくはなかった。関如來が「美術界波瀾の真相」(後出)で述べているように、辞職の原因には単に方針上の対立ということだけではなく、裏面の部分、すなわち岡倉の人間関係の問題も介在していたとみなければならぬ。

岡倉辞職によって起こったいわゆる美校騒動の渦中、岡倉の親友でやがて本校の校長となる久保田鼎が「岡倉氏が本校を去るの機へ既に遅し云々」(385頁参照)と述べている。それは本校内外の状況が以前から岡倉に不利な方向へ推移しつつあったことを立場上熟知していた久保田の、友人ならではの苦言であった。この状況の変化を如実に示しているのは明治三十年の春頃からジャーナリズムに本校および岡倉に関する批判的な論説やゴシップ記事が登場し始め、次第に数を増していることである。その間の経緯を簡単に記しておく。

本校ないし岡倉批判の第一声を放ったのは「国の産業としての絵画」(明治三十年三月十六〜十九日『読売新聞』に四回連載)の筆者春郊生(在巴里と附記されている)である。論旨を要約すれば、審美上の

日本画、油絵の優劣論は措き、国益(輸出)上の観点から今日の日本の絵画をみると、西欧では日本画は好古者、好奇者の一部の需要を充たしているのみで、一般に室内装飾に用いられ世界的商品となっている油絵と相拮抗しようなどと企てることは無意味であるから、油絵をこそ輸出すべきであるとす。そして、ここで問題となるのは油絵が日本で発達し得るか否かということであるが、よく咀嚼し能く消化し能く同化するのが古来日本人の特長であり、しかも美術思想に富む国柄であるからには、奨励さえすれば発達しない理由はどこにも無いとし、東京美術学校の西洋画科の良教師少なく教授用品の不足している現状を批判し、真正の油絵教育のための学校拡張を訴え、次の拡張方法を提案している。

一、十四五名の俊髦を海外に留学させ、帰国後教員とし、良教師養成の方法を確立する。

二、各国古今諸流派の名画を蒐集して参考品とする。

三、参考品補充のために臨写を購い、または臨写させる。

四、二、三で入手できぬものは広くそれらの写真を集める。

五、優待費生を置き、在学中または卒業後海外へ留学させる。

この論は本校の基本方針がフェノロサ、岡倉の美術理論上および国益上の日本画優位論に則って定められていたのに対して、国益上の優位論を否定することによって方針の根底を切り崩そうとするものであった。

右の論説に対して無記名こと大村西崖は美術時評「ひとり言」(同年同月二十二日同紙)で「日本美術に對する外國のありさまを報道するハ、大に國風自慢の迷夢を覺ます力あり。春郊生の報ずるとこ

る甚よし。」と絶賛し、春郊生が除外した審美上の問題を探り上げ、日本画は写実の撰択、光線の効果などを欠く不具なるもの（油絵からみて）であると述べ、その点における優位説をも否定しようとした。ただし、西崖はこの時点では橋本雅邦とその弟子たち（日本絵画協会の二三の画家）を、右の欠点を補わんとして成功し、また、成功を全からしめんと企てる者として高く評価している。

この三月には岡倉率る日本絵画協会の第二回共進会が上野公園内で開催され、第一回のと異なり、日本画旧派と西洋画派を除いた日本画革新派の作品が公開された。諸新聞が競って作品評その他の記事を掲載したが、『毎日新聞』連載の「第二回絵画共進会双対評」（呑含生）は第一に小堀鞆音の「源為朝」（本学蔵「武士」）を探り上げて主に考証上の観点から手厳しく非難し、第二に村田丹陵の「月夜望岳」を探り上げてそれを可としながら、丹陵が「絵画協会流」すなわち「湖塗模稜、脂章の流」に陥ることなく本来の画風を守るべきであると唱えるなど、日本絵画協会の傾向を非難した。この酷評に「美校派」が激昂したという記事が四月十日の『東京新聞』に載っている。

次いで五月十六日の『東京日日新聞』には「某画伯が絵画談」として橋本雅邦、岡倉覚三、東京美術学校制度を非難し、黒田清輝と西洋画科および白馬会のみを是とする論評が載り、翌六月九、十日の『世界の日本』には日本絵画協会と京都の後素協会との軋轢に関する記事（筆者はS・K）が、また、同月十八日の『日本』には「絵画放言」（筆者は善罵先生）と題し、雅邦、岡倉らの理想派を非難し写生派を支持する意見が掲載された。

このように、ジャーナリズムの一角に岡倉および本校批判の声が上がり始めていたときに起きたのが大村西崖の辞職事件（34頁）であった。西崖は九月に辞職するや、十一月には森鷗外、久米桂一郎らの支援を得て『美術評論』を創刊し、その中で自然主義美術支持の立場に立って岡倉派（遂初会、日本絵画協会のいわゆる理想主義）攻撃を続けた。

翌三十一年二月七日より、西崖は『読売新聞』に「藝苑饒舌」の連続寄稿を始めたが、ここに至って岡倉および本校批判の論鋒は鋭くかつ扇動的となった。例えば左記のごとくである。

藝苑饒舌（三）無記菴

○近ごろ美術界の或部分に、「やま」といふ隠語行はる。こゝ美術学校を指せるものにして、この語にハ地理的の山といふ意味と、作略上の「やま」といふ意味とを併せ含むに似たり。誰の造語なるやを知らずといへども、この語を用ゐるものハ、多く美術学校の主義に反対し、美術学校の作略を嫌悪するものなり。されど、これに反対しこれを嫌悪する所以の義に至りてハ、深覈明晰なる所見を有するもの極めて少し。自家の名利、若くハ愛憎の感情よりして、これに反しこれを嫌ふのみにてハいひがひなし。このごろの「日本」の「紛々録」「時事」の「國畫所見」などにて傳へられたる如き、卑しむべき内情、作畧ハ、如何なる義よりしても悪むべきものにて、これを責むるにハ、たゞ正々たる道義を以てすべきのみなれども、その美術上の主義に反対するからハ、これに反対しこれを屈服せしむべき、堂々たる審美所見なかるべ

からず。彼等が作畧の悪むべく、彼等が内情の卑しむべきことハ、たゞ名利の爲に云爲する小人等のならひとて、守るべき秘密すら、いつ誰の口よりとなく漏れいで、今日の醜事ハ明日の新聞に載ること多く、今ハ誰とてその醜陋を知らざるなきに至りたれば、彼等が作畧の汚きハ、事新しく攻撃するを要せず。されど、彼等が奉ずるところの主義、所見に至りてハ、審美上の正理を以て、明らかにその邪曲を照らさざれば、たゞ鶴繪と嘲り鬼氣と刺るのみに止まり、彼の偏僻なる觀念理想に代ふるに此の陳套〔そし〕なる雅致氣韻を以てするのみにて、畢竟ハ馳こつこの兒戯たらむのみ。邪氣を破り正見を立て、進境一段ならむことハ、到底望むべからず。「おやま」攻撃の諸子、會合に擬勢を張り、秘策に魂膽を運らすとも、終にハまた／＼みづから作畧の渦中に溺れ去りて、その勝敗また決して美術上の優劣とハならず。眞に藝苑に忠實なるものハ、この際宜しく畧を捨て、理に據り、利に眩まずして義を存し、言説に文筆に侃々諤々して、所謂理想のはかなさを辯じ、所謂觀念の下らぬを論じて、彼の鬼窟裏の活計を打破せむことを要す。霜を踏みて堅氷到ると聞く。作畧、内情の醜陋まづ世に傳へられて、主義所見の邪曲ついて漸く破れむとするか。我等ハ美術學校の失を認むると同時に、なほ「おやま」攻撃者の理に味きを思ふ。

(明治三十一年二月十五日『読売新聞』)

文中の「日本」の「紛々録」とは明治三十一年二月中に「日本」新聞に連載されていた「美術紛々録」のことで、岡倉周辺のゴシッ

プを主に記したものの。「時事」の「國畫所見」は同年一月二十八、三十日、二月三日の『時事新報』に掲載された無記名の「國畫所見」のことで、日本美術協会と日本絵画協会を論じ、後者については「美術学校派」(下村観山、菱田春草、西郷孤月、横山大観、本多天城の名を掲げ、「斬新にして奇異なる形式」と記している。)の由来や内情を詳述している。明治三十一年初頭からジャーナリズムにおける岡倉非難の傾向が特に強くなり、右二篇の外に各紙に批判的記事が載ったが、西崖は美術理論上からなお一層攻撃せよと説いたのである。この西崖の論評が紙面に載る少し前の一月初めには野村文挙、望月金鳳、鈴木華邨、梶田半古、畑仙齡、高橋玉淵、福井江亭、田口米作、村上委山、山田松溪らの発起による日本画会(会頭末松謙澄、副会頭林忠正)が発足し、岡倉らの日本絵画協会に対抗する姿勢を示した。西崖の論評にはこうした形勢も作用しているかも知れない。ただし、日本画会は質よりも量をもって岡倉派に対抗しようとしたことが災して、第一回展(同年六月、於日本美術協会列品館)は盛況を示したものの以後は振るわず、概ね不評を買うのみとなった。

同年三月十七日、岡倉は帝国博物館総長九鬼隆一と齟齬が生じて同館理事兼美術部長辞職願を提出した(同月二十二日受理)。その間の事情については後出の「美術界波瀾の真相」の記述に譲るとして、この辞表提出の翌日から三日間、『読売新聞』に西崖の上記のような主張の効験とも見られる「美術教育に就ての私見」が連載された。筆者は顧預子〔ペンネーム〕。本校の方針を理論的に真向から批判している。筆者は先ず美術政策は宗教政策と同様に国民の取捨撰択に任ずという原則を適用すべきであるにも拘らず、政府は美術学校を設け

て日本古来の絵画、彫刻の教育のみ行ない、国民の自由な嗜好に干渉して国粹の方向に偏倚せしめようとしたと批判し、仮りにそれが国粹保存の趣旨によるものとしても、泰西美術の教育を排斥すべき理由はなく、特に現今のように諸事百般欧化しつつあるとき、美術政策は国粹保存と泰西美術輸入を同等に奨励するものでなければならぬとする。また、仮りにそれが日本美術優位説に基づくものであるならば、その説こそ甚だしい謬見であり排斥すべきであるとする。この点については「我邦の繪畫の妙ハ形式的なるにあり裝飾的なるにあり油繪の妙なるハ宇宙の眞を寫せるにあり自然の美を發揮せるにあり」と、日本画と油絵は全く性質が異なるものであるから優劣を論ずべきでないことを論じ、本校が日本画優位説を奉じて取長補短の安易な考え方から日本画を油絵の手法に倣って改良しようとしているのは却って日本画本来の妙味を損う有害無益な試みであると批判している。そして、本校が根本的に方針を改め、東西美術を同時に奨励し、即刻西洋彫刻教育も実施すべきであると主張しているのであるが、この点に関しては、日本彫刻と西洋彫刻の間には日本画と油絵ほどの相異は無く、主として材料の相異があるのみだから、別々に科を設けず、一科の中で「我邦の彫刻術に比して遙かに上位にある」西洋彫刻術の教育をも実施すべきであり、そのための経費は美術学校に置くべきでない工芸諸科を廃止し（別に工芸学校を設置するか、または工業学校に編入すべしとする）、その分を充てればよいとしている。

筆者が誰かは不明であるが、論説の大筋は本書第二巻に収録する黒田清輝著「美術教育の方針」等と似ており、特に工芸諸科の処置

に関して黒田と久米桂一郎が京都府下の実地調査（明治三十二年）まで行ったことなどからみれば、黒田近辺の人物に限定されるだろう。西崖などはこの論説を「ほど正鵠を得たり」としながらも、工芸諸科廃止についてはやや否定的であり、一方、日本画と油絵の比較の点では「階級の勝劣を争へば、和畫ハ洋畫に及ばざるべし。」と、油絵優位論側の立場をはっきりと示していた（同年三月三十日『読売新聞』所載「芸苑饒舌」(四)）。

以上、ジャーナリズムにおける岡倉および本校批判の動向をビックアップしたが、岡倉校長辞職前後のころには一般に言論界では岡倉の美術振興方針を否定するか、あるいは肯定はしてもそのみが全てではないという空気が非常に濃厚になっていたように感じられる。

(二) 連袂辞職と日本美術院創立

岡倉辞職に続いて教頭格の橋本雅邦も辞表を提出した。周囲の慰留工作にも屈せず辞職したのはまさに次のような岡倉に対する心情によるものと思われる。

彼の人は中々自己の苦心を人に向つて語る人ではありませぬが、美術學校の創業時代の如き、同氏の盡力といふものは實に非常なものでありました、文部省からは學校への資金が極めて小額で、中々やり切れない難局を、同氏は旨く切つて廻られた、若し斯道開發に一身を捧げた同氏でなかつたなれば、誰か能く此難衝に立つて効果を奏することが出来ませう、私共は全く同氏が献身の盡力を目撃して、實に其熱心に感動し、同氏の心中に惚れ込

みました、私は思ひます、人生意氣に感ずる以上は、功名誰か論
ぜんの覺悟がなければならぬと

〔橋本雅邦翁〕明治三十二年四月二十七日談話。田村松魚筆記。同
年六月博文館発行『明治十二傑』所収)

岡倉辭職に端を發した美術学校騒動の經過については「美術界波
瀾の真相」その他(後出)の記述に譲る。騒動後、最終的に辭職し
た教官は左記のとおりである。

教授 橋本雅邦、川崎千虎、磯野徳三郎、岡崎雪声

助教授 六角注多良、劍持忠四郎、新納忠之介、西郷規、横山秀

鷹、岡部寛弥、寺崎広業、桜岡三四郎、小堀鞆音、関保
之助、下村観山

嘱 託 後藤貞行、桜井正次、菱田三男治、山田忠蔵、前田香雪
このうち、新納、西郷、横山、岡部、寺崎、桜岡の助教授六名に
対して文部省は懲戒免官という厳しい処置を下した。なお、彼らの
履歴書(本学蔵)を見ると、岡部、寺崎、桜岡の分には「大正元年十
月十五日勅令第三十号ヲ以テ懲戒懲罰免除」という書込みがなされ
ている。

本校を去った岡倉は三ヶ月後の七月一日、橋本雅邦をはじめとす
る連袂辭職の面々と、本郷湯島天神町に日本美術院創立事務所を設
け設立趣意書を發表。主幹橋本雅邦、評議員長岡倉覚三、幹事劍持
忠四郎、正員橋本雅邦、横山大観、下村観山、菱田春草、六角紫水
ら二六名、名誉賛助会員二条基弘、川上操六、谷干城、フェノロ
サ、ビゲロウら、特別賛助員川合玉堂、幸田露伴、尾崎紅葉、坪内

逍遙らという体制で私設の美術制作研究機関を発足させ、ビゲロウ
から寄せられた一万ドルの資金援助に意を強くして、同年十月十五
日には新築なった谷中初音町四丁目の研究所で盛大な開院式を催し
た。また同時に院内で日本絵画協会第五回絵画共進会と日本美術院
第一回展覽会を開いた。当時、岡倉は未だ三十七歳であつて、野に
降つたとはいえさらに日本画革新派の指導に尽くし、明治三十七年
以後はポストン美術館のエキスパートとなって米国滞不在いしは外
国旅行が多くなつたが、古社寺保存会委員として、また、明治四十
年文展開設の際は審査委員として美術行政にも係わつた。その間に
The Ideals of the East (明治三十六年)・The Awakening of the
East (同三十七年)・The Book of Tea (同三十九年)その他の著述
や講演などにより日本文化の海外への紹介につとめたことは一般の
知るところである。大正二年歿。五十二歳。

(三) 後任校長

岡倉辭職後、本校の校長にはその知友高嶺秀夫が兼任のかたちで
就任し、暫くして久保田鼎がこれに代わつた。

高嶺秀夫は安政元年、会津蕃士の長男として生まれ、蕃校に学
び、藩主の御側動となつた。会津戦争後、暫く謹慎、幽居の命令に
服したのち、福地源一郎の塾日新舎や沼間守一の塾、箕作秋坪の三
又学舎、次いで慶応義塾に学び同塾の英学教員となつた。明治八
年、文部省より師範学科取調のためアメリカ留学を命ぜられ、同
十一年帰国後東京師範学校の教員(動物学、教育学、教授法等)とな
り、校長伊沢修二の補佐役を勤め、同十四年に校長に就任。同二十
二年、東京美術学校商議委員、帝国博物館理事(天産部長。のちに歴

史部長兼任)となり、同三十年、女子高等師範学校長に就任。同三十一年三月から十二月まで本校々長を兼任した。同三十七年から四十年にかけては東京音楽学校長も兼任。文展審査委員なども勤め、明治四十三年歿。浮世絵の収集を通じてフェノロサやビゲロウとも交際があった。

久保田鼎は安政二年江戸生まれ。旧名理三郎。旧中津藩士。明治七年文部省に入り、同二十年東京職工学校幹事。同二十二年帝国博物館主事。同二十三年本校幹事。同二十四年幹事職廃止後工場監督嘱託。同二十五年臨時全国宝物取調掛。同二十八年、帝国博物館理事(工芸部長)、同二十九年本校研究科考授業嘱託、古社寺保存会委員。同三十一年五月本校幹事。同年十二月本校教授兼任、校長心得。同三十三年一月本校校長。同三十四年八月校長を依願免官、東京帝室博物館主事専任となる。同四十年十二月奈良帝室博物館長兼京都帝室博物館長。大正十三年奈良帝室博物館長専任となる。昭和六年退任。昭和十五年歿。

⑤ 美術学校騒動関係資料

岡倉校長辞職および教官連袂辞職の事件は諸新聞、雑誌に書きたてられ、美術学校騒動としてのちまで人口に膾炙した。最も執拗な報道を続けたのは『読売新聞』で、なかでも関如来執筆の「美術界波瀾の真相」その他の連載記事は徹に入り細に互って事件の推移を報道した。関如来は後年、このことを次のように記している。

當時、自分は讀賣新聞記者として帝室博物館の嘱託を受け、岡

倉主任の許に帝國美術略史に執筆し、また臨時博覽會事務官の嘱託をも兼ねて、久保田鼎と共に勤務してゐたが、天心が博物館美術部長を辭すると共に同じく辭任し、九鬼が副總裁を免ぜらるると共に、久保田と共に嘱託を解かれ、爾來専ら讀賣記者として、久保田を中心に、九鬼には絶對に服從せず天心とは不即不離の態度を以て接近し、盛んに此の運動渦中に活躍して居たのである。

(『日本画壇回顧四十年・東京美術学校紛擾事件』関如来。『塔影』第十二卷第十号。昭和十一年十月十八日)

以下、「美術界波瀾の真相」その他、『読売新聞』所載の関連記事を抜粋して紹介しておく(原文のルビは必要な箇所のみ)に記す。

○美術界波瀾の真相

九鬼隆一氏が博覽會副總裁を辭してより、中央美術界の魂膽頻りに世の評判となりしが策士連の運動遂に効を奉して斯壇の面目ハ漸く茲に一變せんとするに至りたり今其真相を表裏の両面より觀察すれば大凡左の如しと語るものあり

九鬼博物館長の留任運動 九鬼氏が博覽會副總裁の椅子を離れたる始末ハ茲に言はず、されど此事ありしより平素九鬼氏と意見を異にする面々ハ此機に乗じて氏の博物館總長をも辭退せしめ進んで之を我が美術界より放逐し去らんとするの結構あり、然るに九鬼氏に於てハ之に反して假令博覽會副總裁の椅子ハ離るゝも博物館總長の位置のみハ飽まで保たんとの望なりければ其初め九鬼氏